

春燈

2月号

February 2012



主宰の句

安立公彦

憂国忌国を詠はぬ男の子らよ

幾たびの十二月八日ただ寒し

己が足音己が身つつみ落葉径

暮色ともしぐれとも旅の梓川

涸川に雲影あそぶ信濃かな



久保田万太郎の句

夏場所や土俵いのちの名寄岩

『流寓抄』昭和三十三年

掲句の「名寄岩」に目を引かれた。数多い相撲句の中で、有名なのは〈初場所やかの伊之助の白き髭〉しかし、「名寄岩」の句は昭和二十八年夏場所の作品。この年の夏休みに名寄岩関に相撲の指導を受けた。当時中学二年だった私は、関取のおなかの太さに仰天した。「怒り金時」の異名を持つ名寄岩は、仕切を繰り返すうちに身体が真っ赤になってくる。まさに、土俵に命懸けだ。

西谷良樹

たよるとはたよらるゝとは芒かな

「春燈」昭和三十二年

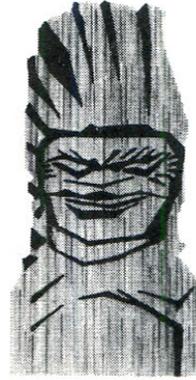
0

荒々しい日本海に注ぐ雄物川の河口。句仲間を誘い、車で叢芒の間を抜けると漁師の船溜りがある。しかし今通ってきた輝くような光景を句にする人はいない。

万太郎師のこの一句に出会い、私は軽い衝撃を覚えた。振れそうで振れない芒の叢を「たよるとはたよらるゝとは」と擬人化した万太郎師の手腕。また、一句の中に漢字は「芒」の一字、銀色の芒を際立たせている。

長谷川友子

燈下集



○ 豊谷青峰

湯の町の川で洗ひし冬菜かな

頬かむりして妻と並びし砂湯かな

車座に袋回しの落葉かな（龍ヶ丘俳人墓地）

大宇陀は母の在所や葛根掘る

つめて結ぶ銀杏返しや一葉忌（床山徳徳屋）

○ 高埜良子

照紅葉延命水の光前寺

立冬や信濃分去れ道標

落葉掃く人へ駅前遠会釈

石路の花明りの土蔵紋どころ

片時雨温泉宿へ急ぐ朱ヶの橋

○ 吉川隆

板前の憩ふ小春の厨口

冬の日の控へ目がちの茶室かな

菰巻かれ老松しやんとしたりけり

「故郷」の歌に山々眠りけり

おしつこの子小脇に走る七五三

○ 三代川玲子

冬紅葉うなづき合へるひとのぬて

廃校の冬日を返す硝子窓

とやかうや足を湯婆にねまりけり

冬月や灯明台の畳敷

すれ違ふ恋の行方や浮寝鳥

○ 本田 保

しぐるるや放浪詩人山頭火

短日やいつまでつづく立話

山茶花や日差し優しく柔らかく

落書を面白がつて七五三

小春日や亀が甲羅を干してをり

○ 瀬戸 峰子

落葉踏む音ためらひぬ登城坂

落葉せる柵の山に夕日落つ

群鴨や水面の山を動かしぬ

湯豆腐に常より熱く語りけり

降る星を散りばめてをり冬木立

○ 棗 怜子

湯豆腐や今の幸せかみしむる

今聞きし名をすぐ忘れ肌寒し

日記買ふ心を書かぬこと決めて

小春日や収集切手のページ繰る

散紅葉野辺の地蔵の御顔染む

○ 北岸 邸子

風なきに揺るるおでんや赤提灯

かなかなや介護認定二となりぬ

志の身に先に逝くなど生身魂

古書市の跡かたもなし秋夕焼

懐剣のごと帯に忍ばず秋扇

○ 今井 弘雄

夕しぐれ片袖ぬらし別れけり

冬晴や梢はすべて空にあり

車窓よりビルの流るる冬夕焼

武蔵野の森の小径や冬すみれ

梁にある火伏の札の霜夜かな

○ 竹内 慶子

柵の吾を呼び止めかをりけり

小春日の母の手術のあつけなく

黄落のさなかにありて癒ゆるべし

久にあふ真白き富士に背を押され

コーヒーをココアに替へて今朝の冬

当月集

安立 公彦選



○ 松山三千江

落葉松の降りつくしてや空の碧
文化の日頁を繰らぬ書もありて
震るるや女子高生の膝小僧
不機嫌な顔も青春冬林檎
耳たぶに冷まず指先実南天

○ 赤羽陽子

蠟燭の鈍き明かりや時雨月
やはらかに名の草枯るる浄眞寺
九体の仏に逢うて冬ぬくし
参道を吹き抜く風や銀杏散る
ざつくりとマフラー巻いて風の街

○ 加藤千春

仕合せをほのかに灯す福寿草
忘年会昭和は遠し演歌もや
枯蠟螂みて尊厳死よぎりけり
遠き日をかもす今宵の柚子湯かな
もみち祭過ぎて丹波の曇りぐせ

○ 矢口笑子

煌々と灯して寂し三の西
とりあへず算段つきし熊手かな
着るほどに馴染む袖や一葉忌
何気無き色の装ひ蜜柑山
ぐい呑の糸尻粗し寒波来る

○ 都丸美陽子

無住寺の魚板の瘦せや石路の花
相輪の金色著し山眠る
銀杏落葉並木果つまで歩みけり
吊るされしままの背広や年の暮
取り敢へず今日の幸せ柚子湯かな

春燈の句

安立 公彦選

ゆく秋や空堀はしる風の音

千葉 海村 禮子

行き交ひの人のぬくもり三の酉

貰ひ来し薬の嵩や年の暮
老眼鏡を手もとに老いの冬ごもり

霜月の月冴えざえと出でにけり

焚火の輪うしろ身温め話しをり
まろやかに十一月の夕日落つ

かさと音かさと踏みゆく落葉道

寄り掛かるベンチ一つの小春かな

ホスピスに晴着の母子や七五三

神奈川 石田 康明

冬日影妻は撒き餌を懇ろに

大飛びの力は見せじ冬蝗

生牡蠣は美味しと言ひつ故郷自慢

神奈川 河本由紀子

悴むや窟にひそむ怨の闇

ホスピスの友に初湯のありにけり
スカートの使ひ上手や冬の虻

山頂にともる一灯山眠る

京都 平田 榮子

由来とく若き尼僧や水仙花

襟巻して少年の顔のぞかする

時雨中たちまち烟る山の彩

冬木立縫ひゆく二列の園児かな

捨小猫子らに鳴き寄る小六月

同齡の談志逝きけり木の葉雨

耳しひに広野千里の雁渡る

兵庫 伊地智浅江

ながらへて果たせぬ夢や雁渡る

実千両珠玉の一句たまはりし（小石珠子先生へ）
昼席の左右煤逃らしきかな

東京 小島 昭夫



余言

安立公彦

夕しぐれ鷗外漁史の胸像に

西川 保子

「漁史」は文人の雅号の下に添える語。近代以降の文人の中で、まこと漁史の名にふさわしい作家は鷗外森林太郎を最とする。「鷗外漁史」の響きもよい。

この句、その鷗外の胸像に折からしぐれが降りかかったという。一句の形もその胸像を目交にするかに姿正しい。なお鷗外の墓所は三鷹駅南口の禅林寺にある。墓石の銘は「森林太郎墓」のみ。これが鷗外の遺言によることは周知の通りだ。蛇足ながら鷗外を師と仰ぐ太宰治の墓は、鷗外の墓の斜め向かいにある。

時雨忌や花入の銘旅枕

佐藤 信子

この句も格調の高い作品だ。俳諧の祖とも言うべき芭蕉が、大阪御堂筋の花屋仁右衛門方で没したのは元禄七年十月十二日。一三八年前のことであつた。享年五十一歳は今から考えると若い。わが春燈の祖は芭蕉忌をどう詠んでいるのか。へむさしのの寺のト間の桃青忌 万太郎。この句「上野清水堂にて」の前書がある。へ旅一夜明けて翁の忌なりけり 敦。これは松島芭蕉祭での句。

掲出句。「花入」は「花器」、その銘は「旅枕」。松尾芭蕉が生涯を通して追求した「蕉風」の背景とも言うべき「旅」への思いをこめた」句である。「や」切れ「名詞」止めという本格的な表現が、この句を動かし難い」句に仕立てている。

かばひ合ふかに重なりぬ朴落葉

柴崎 富子

初夏、高枝に咲く朴の花は白花九弁の香気を放つ。初冬になると大きなその葉は乾き、朴の落葉は樹下を歩む人の足裏で、黙考を驚かすかに大きな音を立てて崩れる。

作者はふと視野に、その落葉の重なり合っているのを見る。それはあたかも落葉した朴の葉が、お互いを庇っているかのように見えるのだつた。落葉という自然の摂理を、有心のものとする作者の優しさは、同時に俳句のこころを言い止めているとも言えよう。

車椅子の高さほどよき草紅葉

井上 春子

最近「車椅子」の句をよく見かけるようになった。それは車椅子を利用する人の多さを示すものでもある。しかしその大方は対象としての車椅子だ。

作者はリハビリのために車椅子を使っていると聞く。だがそのリハビリを作者は嘆いてはいない。むしろリハビリを肯定し、つとめて外気に触れる。「高さほどよき」にその思いがよく出ている。前向きな姿勢が、しかし何気ない表現で詠まれ、みごとに一句となつてゐる。

長き夜を座り直して受話器取る

長浜 徳三

作者は昨年八月、年賀状と俳句の版画展を開催、多くの来場者を得て盛会裡に終了した。その版画の賀状は私も頂いているが、印刷が大方を占める中で、手彫りの年賀状は如何にも初春を言祝ぐゆかしさに満ちている。

この句、余程大事な用向きの電話なのだろう。「座り直して」に電話の相手との関りがよく出ている。事は「受話器取る」だけの内容だが、そういう日常の些事にうた心を見出すことも、大切な句作の一法である。

短日やふつと消えたる己が影

鷹崎由未子

この「影」は氣象現象としての影ではない。心象風景の中に浮かび消えゆく影である。それは面影であり、また或ると

きは翳りであるかも知れない。感情と言うほどの情念ではないが、創作には欠くことの出来ない心象である。

私たちは日々暮しの中で、この句のように或るものが「ふつ」と浮かびまた消えることをよく経験する。それはまさに俳句への糸口である。この句はそのことを良く実証している。ただし表現の具体性は欠かせない。

小生とつぶやいてみる小春かな

小嶋 恵美

この句を見て思わず笑みがこぼれた。「小生」は男子が自分を指して使う謙称。作者とは年に二回会うか会わないかだが、いかにも女性らしい物腰の女流だ。その作者がある日ある時、ふと「小生」と呟く。前後の関りは分からないが、「つぶやいてみる」だから意識しての「小生」だろう。女性が男性の言葉を使うのは、場合によっては或る意味で新鮮だ。この句に浮かぶユーモアもその一つ。

生きてゐる影を落として冬の蝶

佐橋 敏子

三冬を生き伸びている昆虫の中で、蝶はことに哀れふかい。〈落つる葉に撲たる冬の胡蝶かな 几薫〉という句もある。掲出句、冬日に羽を開いている蝶。作者はその蝶の影に、生き物としての冬蝶の哀れをしかと見とどける。その思いの中には、深まる冬の寒さもあろう。「生きてゐる影を落して」が絶妙だ。